伊達道具

－織部スタイルの誕生－

土岐市美濃陶磁歴史館

〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻 1263

TEL 0572-55-1245　FAX 0572-55-1246

1　南蛮文化の流入と織部スタイルの誕生

鎌倉から室町へと変わろうとする時、南北朝の争乱と呼ばれる混乱期が訪れました。この時、婆沙羅（ばさら）と呼ばれる異形（いぎょう）の集団があらわれました。「此頃都ニハヤル物」で始まる二条河原の落書の中にも「ハサラ扇ノ五骨」と出てきます。この婆沙羅と呼ばれた人々は身分秩序を無視し、華美な服装や振る舞いを好みました。佐々木道誉や土岐頼遠は婆沙羅大名の一人として知られています。

そして、室町から江戸へと変わろうとした時、戦国時代と呼ばれる動乱期が訪れました。この時、南北朝期と同様に傾奇者（かぶきもの）と呼ばれる異形の集団があらわれました。彼らは婆沙羅と同様、華美な服装や振る舞いを好み、身分秩序を無視しました。隆慶一郎の小説『一夢庵風流記』(1)で知られる前田利益は傾奇者の代名詞といえます。南北朝期と戦国期、2つの動乱期に、婆沙羅と傾奇者という異形の集団が誕生したことは、動乱期には、新しい活力が生まれる要素があることを物語っているのかもしれません。

さて、戦国期は動乱の世の中ではありましたが、「今が弥勒（みろく）の世なるべし」と表現された活況に満ちた時期でもありました。鉱山開発は目覚しい発展を遂げ、特に石見（いわみ）や生野（いくの）に代表される銀山は一時期、世界の銀産出量の三分の一を担っていたとも言われるほどでした。この銀を目当てに、世界各地から人と物が流入しました。特に火縄銃をもたらした南蛮文化は戦争の方法を一変させるなど、大きな影響を与えました。この南蛮文化によってもたらされた文物（ぶんぶつ）、南蛮人の服装や持ち物は傾奇者の装いとして取り入れられ、注目を集めました。

国内で作られていた道具の中にも、この南蛮文化の影響を受け、華美な装飾が加えられ、目立つ、派手な道具が登場し始めました。この変化は茶道具の世界を中心として始まり、その萌芽は16世紀末に始まる黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部黒の生産といえます。こうした装飾性の変化が結集して生み出された道具が江戸時代の初め、17世紀初頭に登場する織部と呼ばれるやきものです。

(1) 織田信長に仕えた前田利家の兄、利久の養子となった前田慶次郎利益を主人公とした小説。『花の慶次』などのマンガにも取上げられ、知られるようになりましたが、史実としての資料は江戸中期以降に作られた逸話集が多く、実際には謎の多い人物です。傾奇者としての振る舞いについては『前田慶次道中日記』などから、ある程度は的を得た人物像であるといえるでしょう。

2　当世（とうせい）流行る伊達道具

犬枕

「したひ物」

一　当世流行る伊達道具

一　数奇屋の作事

一　遊山見物

『犬枕』の一節です。これは慶長（けいちょう）期に書かれたとされる仮名草子（かなぞうし）の一つで、清少納言の『枕草子』のパロディ的作品です。ここに慶長期に生きた人々が「したい物」、やりたいことやほしいものが記されています。

道具は日々の暮らしの様々な場面で使われます。台所など、普段は人目に触れる機会の少ない私的な日常の空間（ケの場）を道具にとっての裏舞台とするなら、座敷などの饗宴や接待の場である公的な非日常の空間（ハレの場）は、人目に触れる表舞台といえます。

『犬枕』に記される伊達道具とは、華美で目を引く道具という意味で、当時（慶長期）、こうした道具が流行り、これを持つことが人々の憧れであったことが良く分かります。そして、人目を引く道具ということから、「伊達道具」の多くは表舞台から誕生したといえるでしょう。

この「伊達道具」は慶長期（1596 ～ 1615）後半を中心に流行り、寛永期（1624 ～ 44）には減退の傾向を示すことから、一時期に花開いたスタイルといえます。土岐市では、「伊達道具」が流行した時期は、まさに元屋敷窯の時代、やきもの「織部」の時代でした。

3　道具の変化

生活の表舞台・裏舞台、そこで使われる道具の中で、装飾性を増すものはどんなものなのでしょうか。ここでは、道具をグループに分けて、それぞれの変化をみていきましょう。

(1) 調理道具

江戸時代になると各々が自分の膳で食事をする食膳の習慣が普及し、一汁二・三菜が定着し始めました。こうした食事の習慣を支えた道具が調理道具です。江戸時代は現代に近づくほど食生活も多彩になり、煮もの・焼きもの・練りもの・和えものなどの料理がありました。こうした料理にあわせて調理道具も様々でした。

①擂鉢

中世以来使われている擂鉢は、料理の裏舞台で活躍した道具の代表といえ、現在でも少なからず使用されています。擂り目の数の増減はありますが、装飾はほとんど変わらず、飾らない道具といえ、裏舞台で活躍したと考えられます。

②水注

水注は中に液体を入れて注ぐための道具です。醤油や酢などの液体調味料や灯火具に注ぐ油を入れる容器としても使われました。また、茶道具としても用いられ、懐石や酒席などの饗宴の場でも使われたと考えられます。

この道具の中から様々な装飾の織部スタイルが登場することは、表舞台を意識したものといえるでしょう。

③片口鉢（かたくちばち）

樽や甕などから他の容器に液体を移す中継道具として使われ、中には容量の決まったものもあり、量り売りの際にも用いられました。また、擂鉢・捏鉢（こねばち）と同様の機能をもっていたとされる道具でもあります。時には酒器として使用されることもありました。

この道具の中にも織部スタイルといえる装飾が加えられたものが少量みられることは、表舞台で使用される機会を意識したものといえるでしょう。

(2) 酒道具

客人に酒食を出してもてなす饗応の場は、日常生活を離れたハレの場といえます。特に身分の高い客の接待には、それ相応の道具を用意する必要がありました。酒道具はこうした場所で使われることから、招客の目に触れる表舞台の道具といえるでしょう。

①杯（はい）

酒を飲む際に使われる杯は、絵画資料や文献資料から、漆器が中心であったとされています。17 世紀前半に陶磁器製の杯や猪口（ちょく）を使うようになり始め、江戸時代中頃には普及したとされています。織部スタイルの頃には陶磁器製の杯自体が珍しいものだったといえるのかもしれません。

②徳利

酒などの液体を入れる容器で、油・醤油・酢・みそなども入れていました。他にも片口鉢・チロリ・銚子（ちょうし）などが同様の道具として使われました。酒屋の小売用・運搬（うんぱん）用の容器のほか、酒席に用いられました。この道具の中には織部スタイルといえる装飾が加えられたものもあることから、表舞台での使用も意識された道具といえます。

(3) あかりの道具

茶会における夜咄(よばなし)や暁(あかつき)の会の時には、あかりが重要な役割を果たしました。現在のように電気のない時代では、月明かりを除くと、灯火具が周囲を明るく照らす唯一の照明であったといえます。また、宴会などの饗応の場でも使われたことから、人の目に触れるハレの場で活躍する表舞台の道具といえるでしょう。

江戸時代は鰯油(いわしあぶら)や菜種油(なたねあぶら)などの安価な油が普及し始め、日没後の時間も楽しむ人々が増えました。こうした中で、日々の暮らしの中にもあかりの道具は普及し、表舞台から裏舞台へと活躍の場を広げていきました。あかり道具の変化を見ていくと、こうした暮らしの変化に対応するように華美な装飾は減退し、便利で使い勝手の良い道具へと変化していく姿が確認できます。

①灯明皿(とうみょうさら)

灯火皿・火皿とも呼ばれる一般的な灯火具の一つです。2枚セットで使われることが多く、油を入れる上皿を油皿と呼び、滴る油を受ける下皿を受け皿と呼びます。このセットのことを灯盞(とうさん)とも呼称します。油皿に灯油（菜種油や鰯油など）と灯芯を入れ、カキタテと呼ばれる芯押さえで固定し、皿の口縁部で火を灯します。この時、灯芯から滴る油を受けるのが受け皿の役割です。簡素で、装飾は変わらないことから、裏舞台の道具といえます。

②灯火具

身・蓋・皿で構成されるあかりの道具で、灯明具とも呼びます。身は油皿、皿は受け皿の役目をします。蓋は芯押さえの役割を兼ねていたとも考えられます。こうした使用法から秉燭(ひょうそく)の一種といえるでしょう。

短檠(たんけい)や灯台などに置かれて使われた事例が民俗資料から分かります。この道具の中から様々な装飾の織部スタイルが登場することから、表舞台の道具として活躍した時期があることが分かります。また、織部スタイルの灯火具の皿は文様など目立つ装飾のものが多くみられることから、灯盞のように重ねて使用する他に、別々に離して用いられることもありました。

③秉燭（ひょうそく）

油を入れた容器に、直接灯芯を入れて火を灯す灯火具の総称です。中央に灯芯を保持する円筒形の突起を持つものが一般的です。底部には釘などに差して固定するための窪みが設けられています。灯明皿を重ねている灯盞が振動に弱い反面、秉燭は一体型であるため振動に強いことが特徴で、灯盞の欠点を克服したあかりの道具といえるでしょう。簡素で、飾らない姿をしていることから裏舞台で使われた道具と考えられます。18 世紀中頃に普及することから、庶民の暮らしの変化に対応して作られた実用優先の道具であったといえます。

④燭台（しょくだい）

蝋燭（ろうそく）を使用するための道具です。江戸時代の初めには蝋燭自体が高価であったことから、限られた人しか所有することのなかった道具といえるでしょう。南蛮人燭台などの織部スタイルの道具が知られており、表舞台の道具といえるでしょう。

⑤瓦灯（がとう）・灯台（とうだい）

瓦灯・灯台は中世には使われていたことが知られています。瓦灯は穴のあいた釣鐘（つりがね）形の蓋と、浅い円筒形の身とがセットになったあかりの道具の一つです。身の部分には他のあかり道具が組み合わされたとも考えられます。必要に応じて、蓋の頂部に灯盞などの別の道具を置いて強い明かりを得たり、蓋をして薄暗いあかりを得たりと、臨機応変にあかりの調節ができる便利な道具です。

灯台は瓦灯とは異なった形態で、燈籠（とうろう）形のものが多くみられます。内部に灯盞などの別の道具を入れて使用したと考えられます。

これらの道具の中にも織部スタイルといえるものが登場することから、時には表舞台に上がることのあった道具といえるでしょう。

(4) 香道具

15 世紀中頃には聞香（もんこう）・香あそびとも呼ばれる香道が大成したと考えられています。香道は茶道と同様に非日常のハレの場の芸能といえ、そこは道具にとっての表舞台でもありました。また、衣服などに香を焚（た）き込めたりと日常の場でも用いられることがありました。

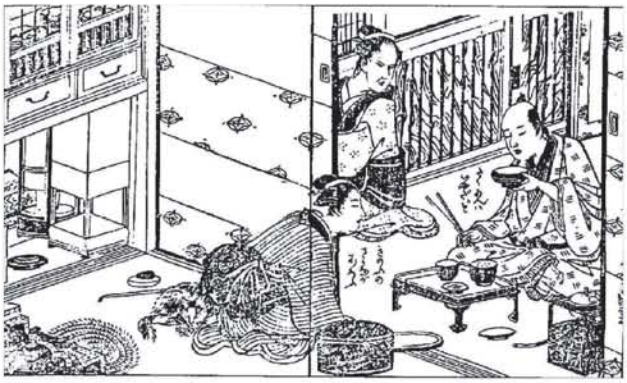
香炉は燭台・花瓶とともに三具足（みつぐそく）と呼ばれ、寺院には欠かせない仏具で、時には威信（いしん）を示す道具として珍重されました。江戸時代に至ると寺請（てらうけ）制度の確立や祖先信仰（そせんしんこう）の広まりの影響で、各家が仏壇を持つようになると仏前での線香の際に香炉が利用される機会が増え、裏舞台の道具としても欠かせないものとなりました。

(5) 煙草道具と火の管理

煙草(たばこ)は安土桃山時代には日本に伝来していたといわれています。茶席でも煙草盆が用意されることがあることから、煙草道具は招客の目に触れる表舞台の道具といえます。また、喫煙の習慣が広まると、普段の生活でも人目に触れる機会が多かった道具の一つといえるでしょう。煙管(きせる)は煙草を吸うための道具で、金属製のものが一般的です。このため、陶磁器製のもの自体が珍しかったと考えられます。また、当初は専用の道具がなく、多くは香道具などを見立てて代用していました。18 世紀に入る頃から庶民の間にも喫煙の習慣が広まり、香盆の中の香炉が火入(ひいれ)に、焼き殻入れが灰落(はいおと)しに変化し、専用の道具が生まれたと考えられます。

煙草に使う火の管理はもちろん、冬場の暖の確保など火の管理をする道具も生活を支える重要な道具でした。これは日常生活の場で暖をとるなど裏舞台の道具として活躍し、時には茶会や饗応の場に持ち出され、招客の目にとまる表舞台の道具としても活躍しました。

食事の風景



さし絵１『教訓不仕候』天明3年（1783）

お酒と煙草

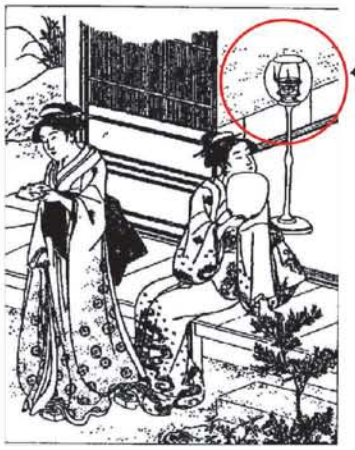
左側にはお酒を飲む人、右側には煙管で煙草を吸う人が描かれています。

さし絵２『昔々於艶云踊子』天明7年（1787）

あかりの道具

ここに
灯明皿など
を使用

さし絵３『絵本紅葉橋』
寛政年間（1789～1800）



ここに
灯明皿など
を使用

さし絵４『通一声女暫』
天明元年（1781）

瓦灯

身の部分と傘の部分に分かれます。

通常、なかに灯明皿・灯明受皿など

を入れて使っていました。

さし絵５　『教草　女房形気』

香炉

左の絵は仏壇にむかって念仏を唱えている男性が描かれています。先祖の供養はこの時代の習慣でした。真ん中に描かれているものが香炉です。

さし絵６『寿常磐仙人米』寛政5年(1793)